

〇〇してみました世界のフィールド

ドイツのポップカルチャー市場調査——2日目

やまなか ゆりこ
山中 由里子
民博 民族文化研究部



コミコン・ジャーニーに潜入してみました (後編)
ドウジンシを「熟覧」する筆者

ドイツ、シュトゥットガルトのコミコン (コミック・コンベンション) をさらに掘り下げて調査するため2日目も会場へ。そこで出会った同人誌作家の女性2人が、日本マンガへの熱い思いを語ってくれた。

正直、二日目で疲れ果て、コミコン会場であるシュトゥットガルト・メッセに戻る気力と意欲は失せていた。ちょうど、市内のリンデン博物館で「日本の印籠」展をやっていたので、「今日は古き良き、小さき日本の工芸品を静かに鑑賞したい……」と朝食を食べながらしみじみ思った。しかし、前日は会場の規模に圧倒され、またコスプレの物珍しさに気を取られ、全体像をつかむのがやっとであったのもう少し掘り下げて調査せねばと気を取り直した。



コミコンの看板

ターゲットをさだめ

二日目にして場に慣れてきたこともあり、会場ホールの四方がバルコニーに囲まれていることに気が付いた。そこ上がり、混みあう会場を見下ろしてみると、フィギュアが詰まったおもちゃ箱のようだ。仮設の壁でゾーンが区切られているのがよくわかる。前日には見過ごしていたが、過激な抗議活動で知られる某海洋保護団体もなぜかテントを出している。海賊みただけだろうか？ 地球を救うヒーローだからか？

ともあれ参加者の話が聞きたかったので、出品者が一番暇そうにしている作家コーナーに向かうことにした。作家といってもプロではなく、いわゆる「ファンアート」や独自の作品を展示して、小物を売っているアマチュアの絵師さんたちである。コミック系、マンガ系、イラスト系と分類されているようだ。日本だったら中学生レベルかなという絵を出している人もいれば、プロ並みの筆の人もいる。みな、カリカリとスケッチブックに絵を描くことに没頭しているので、話しかけやすい雰囲気ではない。

念が浸透していることにも驚きである。

二人は共同で作品を作り、ドイツ各地のブックフェアやマンガ・アニメ専門のイベントに作品を展示してきたらしい。「今回はテーブル代はタダだけど、ライブツィッヒのブックフェアなんて二五ユーロもとられた」。そんなに高いブース代で元がとれるのだから配になったが、「コンホンなんかで結構お金が入るのよ」という。Con-honとはコンベンションの「コン」と日本語の「本」を組み合わせた造語で、ファンがもってきた画帳にイラストを描いて、二〇〜二五ユーロほどお金をもらうシステムになっている。日本のコミケで「スケブ」(スケッチブックの略)とよばれることも後日知った。



マンガの描き方入門書

ドウジンシ発見

とあるテーブルで、DOUJINSHI 800€ の文字が目にとまった。B5サイズほどの薄い「ドウジンシ」をばらばらめくってみると、男性同士の愛を題材とした「ボーイズラブ」のジャンル作品だ。出品者のおねえさん二人は携帯型ゲーム機で遊んでいたが、こちらに気づいてニコツとしてくれたので、「ひとつの作品だけの冊子もドウジンシってよぶんだ。日本では同人誌は何人かの作家さんたちの作品を集めた雑誌のことだけとね」と知ったかぶりしてみた(私の同人誌文化理解が非常に時代遅れのものであるということは後日知ったが、会話のきっかけは作れた)。彼女らは特にアートの学校に通ったわけではなく、マンガが好きで自己流で学んだという。「ボーイズラブのジャンルが専門なの?」と聞いてみると、「ヤオイとか、今流行ってるから。でもファンタジーとかも描いてみたい」と、特にこだわりはないようだ。「やおい」(ヤマ無し、落ち無し、意味無し)の概



インタビューに応じてくれたアイスとシオン

★
ドイツ、シュトゥットガルト

アメコミとマンガの力関係

日本人は味方とみなしてくれただのか、彼女らはマンガの位置づけがコミックに比べて低いことをしきりに嘆く。ドイツのポップカルチャー市場の力学においては、マーベル、DCなどの「アメコミ」がやはり圧倒的に上位にあり、「西洋のコミック、東洋のマンガ」が西高東低の位置関係にあるようだ。コミコン参加者のあいだでもマンガは「目が大きくなって、胸がでっかい」というイメージで、変態か子どもものものと蔑まれていているという。「マンガはもっと奥が深いんだって、知ってもらいたい」。来日したことのない彼女らの知るマンガは、日本のマンガ文化の氷山の一角なのだろうが。